

グローバリゼーション論再考

別府 春海

I. 序

本稿の論旨を上げれば、(1) 従来のグローバリゼーション理論は欧米文明中心主義にすぎない。従来の、欧米文明のグローバリゼーションのみを基にしてあみ出したものは単なる一事例の一般論 (generalization) であり、理論 (theory) とは言えない。(2) 欧米中心的グローバリゼーションの「中心 (ないし核)」を相対化し複数のグローバリゼーション及びその中心を認める必要がある。(3) グローバリゼーションの単位は「文明」だけではなく、他の単位も認める必要がある(4) 複数のグローバリゼーションを比較することによって真のグローバリゼーション理論が生れてくる。

II. グローバリゼーションにおける 西欧中心主義

1. グローバリゼーションの源泉としての西欧

グローバリゼーションが西欧文明に発生していることを論じている一人として、Malcolm Waters (1995) があげられる。(グローバリゼーション) のエスニシティ及び国家への影響を論じる中で彼は「グローバリゼーションが西欧近代の中に求められる限り… (In so far as globalization is sourced in Western modernity) …」という表現を用いている。その表現にはグローバリゼーションは西欧近代の中から生

れてきたという前提が見られる。又、この文脈には、グローバリゼーションは(西欧に発生した)近代化の延長線にあるという考え方がある。同様の考え方はAnthony Giddens (1990, 1991) にも見られることはPeter Beyer (1994: 41) によって指摘されている。Beyer自身 (1994: 54) 19世紀から20世紀にかけて「西欧化としてのグローバリゼーションの限度」が非西欧文化に種々の反動を起させている、という表現をしていることから、彼も西欧とグローバリゼーションを同一と見なしていることがわかる。

然し他のグローバリゼーション論者は、近代化の中からグローバリゼーションが発生したのではなく、反対にグローバリゼーションが近代化の源泉となっているという立場をとっている。Roland Robertson (1992) やImmanuel Wallerstein (1974) はその代表者といえる。彼らは15世紀末期に始まる大発見時代、そして、それに続く非西欧諸地域の征服、植民地化にグローバリゼーションの起源を求める。この立場は資本主義、殊に工業資本主義による資本蓄積がグローバリゼーションの核でありその原動力だとする。

2. グローバリゼーションの内容

近代化の起源がグローバリゼーションの中にあるにしろ、反対にグローバリゼーションが近代化の中から生れたにしろ、両者の関係が不分離であり、グローバリゼーションが西欧の中から出てきたことには変り

はない。グローバリゼーションが西欧文明と不可分の関係にあることはグローバリゼーションの内容を見ることによって明白になる。

例えば、BeyerはGlobalization and Religion (1994:209)の中で、グローバリゼーションをimmanence及びtranscendenceの概念に結びつけている。この両概念はキリスト教やその他の一神教にとって中心的な役割を果たすが、その他、例えば日本の民間信仰においては殆んど意味がない。又Beyerは「平和」と「正義」を宗教の立場からのグローバリゼーションの基本概念とする。この場合、「正義」とは、「平等、人権、進歩、個人及び集団の自決、それに多様性の許容ないし、むしろその祝福」を指す。これ程グローバリゼーションの西欧中心主義を明確に表示した立場はなかろう。

人類学者Arjun Appadurai (1996:36)も同様の立場をとっている。Appaduraiはグローバリゼーションを考えるのに当ってethnoscape, technoscape, finanscape, mediascape, 及びideoscapeからなる5種の“scape”の概念を打ち出している。この中で、ideoscapeとは「政治的イメージであり、国家のイデオロギーや、国家権力を獲得しようとする反体制運動のイデオロギーを指す。このようなイデオロギーは自由、福祉、権利、主権、代表、及び最重要概念としての民主主義を含む一群の思想を内容とする啓蒙世界観より成り立っている」とする。(この文脈ではAppaduraiは‘Enlightenment’と大文字のEを使い明らかに固有名詞として使っている。) Appaduraiにとってideoscapeとは、ヒンズーでもなく、イスラームでもなく、儒教でもなく西欧イデオロギーのグローバルな分布を意味していることは自明である。

Roland Robertson (1992)によればグローバリゼーションは、個人、社会、世界システムとhumanityによって成り立っている。ここで個人を社会制度の基本要素と

することが西欧的であることは既に指摘されてきていることであるが、humanityなる概念をもち出すことに更に西欧的思想が見える。Humanism, humanitarianism, humanities等の一連の類似語に見られるように、humanityとは単にヒトの集合体の人類ではなく、人類愛、博愛、人文主義等を表わす、西欧文明の特殊概念である。このようにRobertsonのグローバリゼーション論も西欧中心主義をまのがれない。

このような、グローバリゼーションを究極には「西欧化」と見なす例は枚挙にいとまないが、それは別稿にゆずることとしたい。(Befu in press)

3. 単一方向のグローバリゼーション

このようにグローバリゼーションの中心が西欧にのみ存在する以上、グローバル化のプロセスも西欧米より非西欧米世界へとという方向しかないことになる。そしてそのプロセスによって非西欧米へ拡がっていくのは欧米の価値とイデオロギーである。その反対のプロセス、つまり、非西欧米価値等が欧米へ拡がるのが、グローバリゼーションの概念でとらえられるとは考えられていない。

4. 相対化

グローバリゼーション論者は「相対化 (relativization)」なる用語をよく用いる。これは、西欧米価値、イデオロギーがグローバル化する過程で非西欧米の地方、地域の文化に適応し、変容することを言っている。それをRobertson (1996)は「普遍なるものの特殊化 (particularization of the universal)」やglocalizationと呼び、Jan N. Pieterse (1995)は「交種化 (hybridization)」と呼んでいる。例えば、キリスト教が世界各地に布教されれば、それはその地域文化の必要性に応じて変容し、特殊化し、土着化し、グローバル化するの当然である。このような意味での文化変容、

文化適応は文化人類学分野では何世代もとり組んできたことであり、そこには何ら斬新さはない。ただこのような現象がグローバルな規模で同時に起り、「グローバル化」という単一の枠組の中で考えられるという点で新しさがなくてもいい。従来の文化人類学では例えば西欧の価値と日本の価値が相対的に同等であり、一方の価値観で他の文化を判断してはいけない、ととなえ、これを文化相対主義と呼んできた。しかし、グローバリゼーション論における「相対化」とは、文化相対主義とは全く異った概念であることに留意すべきである。

この「相対化」の概念そのものを相対化する必要がある。キリスト教が非西欧米へ広がるなら、非西欧米の宗教—例えばイスラーム—もグローバル化し、非イスラーム圏へ広がる。そしてその過程でイスラーム教は結晶化され、土着化していく。これこそ相対化のプロセスに外ならない。相対化の原理はグローバリゼーションの概念と同様西欧米に占有されることはない。

5. 普遍性

西欧米式グローバリゼーション論においてはグローバル化するのは西欧米の価値観であり、その価値観は普遍的なものとされる。正義、人権、民主主義、個人主義、平等、進歩等は全人類に普遍的に適応され得る、又されるべきと考えられる為に「普遍的」と称される。然し、これらの価値は西欧文明の風土で培かわれ、育てられてきたものであり、それが普遍的に適応できるか又されるべきかは、西欧米人のおもわく一存でかたづけられることではない。西欧米文明における「普遍価値」は西欧米の文明の論理の中で普遍とされるのに過ぎなく、全世界の文明、文化が、その論理を受け入れるかどうかは、実証されなければならない問題であり、大いに疑問がある。これについてFeatherstone (1995: 83) は次のように述べている。「一文明内の議論によって、

生れた理論が今やグローバルな規模で疑問をもたれるようになってきた。普遍的と考えられてきた理論も実はドミナントではあるが特殊論にすぎないことが証明されるだろう。」つまり、西欧米は軍事的、経済的、又政治的にドミナントであるが故に、その利点を利用し、西欧米の特殊価値を普遍価値として非西欧米に押しつけてきたのに過ぎない。

更にここで重要な問題点は、西欧米文明の土壌で育った、この土くさい価値が、その文明文化を超越した絶対的な意味で普遍性をもつと考えられていることである。文明、文化を超越した絶対価値の存在が可能なのは実証科学の領域以外の形而上学の問題であり、グローバリゼーション論の論外の領域にある。

III. グローバリゼーションの中心(核)の分類

1. 文明

上記西欧米は唯一のグローバリゼーションの中心ではないことを議論した。この場合、「西欧米」は西洋「文明」を指すことは議論の文脈で察しられたと思う。というのは、グローバル化していると議論されているのは価値であり、価値は得てして文明の表現として見られるとあってよい。ここで、西洋文明がグローバリゼーションの中心となり得るなら、イスラーム、ヒンズー、中華文明等もグローバリゼーションの中心となり得る筈である。但し、このような文明は西洋文明のように、世界規模での大々の資本蓄積を可能にする工業資本主義をその経済基盤としていないため、グローバリゼーション論者にとり上げられなかった。とは言え、このような文明もグローバリゼーションの中心であることには違いない。それはイスラームにおけるpietyなる価値の伝播がBeyerの議論する人権概念の伝播

や、Appaduraiのとなえる啓蒙思想中心の ideoscapeと同様であることから十分に論じられる。(Pasha and Samatar 1997)

HuntingtonはそのClash of Civilization (1996)で、日本は国民国家でありながら文明でもある、としている。この考えを受け入れるとすれば日本文明も価値の伝播の役割を果たしている可能性をもつ。これについて詳しく述べることはできないが、二つの分野において日本文明の価値の海外「輸出」が論じられよう。その一つは宗教であり、も一つは企業価値である。

宗教に関しては、移民の海外移住にともなって、移民は自分たちの宗教を海外へ「移植」した。又、移民による移植とは全く関係なく日本の宗教は外国で信仰の的となっている。禅は北アメリカでは白人たち、特にそのインテリ層で人気があり、「禅センター」なるものは各地に点在する。北アメリカ程ではないが、ヨーロッパでも禅は盛んである。所謂新宗教も海外布教は盛んであり、創価学会 (Ionescu 1997)、PL教団、真光その他多くの新宗教、新新宗教が海外で日本人、日系人以外の人たちによって受信されている。(Clark and Somers eds. 1994) オーム真理教もその最盛期にはロシアだけで四万人信者がいたとされている。

第二の日本文明の海外価値伝播は企業に見られる。(西田1990) 殊に1970年代、1980年代に日本の企業精神を海外企業に何らかの形でとり入れることが少なくとも考えられ、場合によっては実際にとり入れられた。海外の経営学者は日本の高度経済成長の秘訣を、経営組織と同時に日本企業の社訓、社是、社憲に求めた。又宮本武蔵の著した『五輪の書』は80年代には海外の経営学会などで飛ぶように売れた。これは日本の企業家が武士の精神や大名の用いた戦術を重んじることを受けて、彼らもそれにあやかっただのである。但しこの傾向は1990年来バブルの崩壊後下火になった。

2. 国民国家

国家は常時グローバリゼーションの単位としてあつかわれている。「日本のグローバル化」とか「アメリカのグローバル化」といった表現は常にメディアで使われているのがそれである。国家には領土があり、領土の管理、国民の保護、国家としての主権の維持等、文明とは関わりの全くない機能がある。ということは国家がグローバル化するプロセスと文明のそれとは歴然とした違いがあることを意味している。

国際経済は国家単位で比較されることは周知の通りである。例えばGNP、GDP、海外直接投資、ODA等は国家単位で表現され、比較するためにつくられた概念である。文化のグローバリゼーションを考えるに当たっても、「アメリカ大衆文化」は、又「フランス料理」はどうして世界的アピールがあるのか、「日本のマンガ、アニメ」はどうして、アジアで受容され易いのか、ということが問題にされる。(白石1998) ということは国家レベルの国民文化がグローバル化することを指している。

好むと好まずに関わらず、18世紀末葉以来国家が世界秩序の、又、国際政治の基本的単位であるということは我われにとって重要な意味をもっている。現在では国民国家の概念は我われの世界観の中に完全に組み込まれ、意識するにしろしないにしろ、国民国家の存在しない世界は考えられなくなってしまった。その結果、文化や社会も国家の境界線に重複する境界線をもつ、物質的な「もの」であるという風な考え方をするようになった。このような事情で、グローバル化をする単位は日本であり、アメリカであり、ドイツである、と考えるようになった。

3. 多国籍企業

Multinational corporation (MNC) ともtransnational corporation (TNC) ともいわれる多国籍企業もグローバリゼー

ションの単位の一つである。(西田1990, Ohmae 1987, 1995) 国際的経済指数は企業単位で報告されることが多い。例えば世界の銀行のランキング、または企業別海外投資額や従業員数。このような指数は各企業の海外進出の度合や、市場の占有度を示している。「IBMのグローバル化」とか「ソニーのグローバル戦略」のような表現はこのような文脈から出てくる。

多国籍企業のもつ目的や利害は国家のそれとは同一である場合もあるが、むしろ全く違っている場合が多い。例えば国家は国民全体の福祉を考えなければならない。

(この目的を完全に達成するかどうかは別問題だが。) その為には国家は企業に課税をしなければならない。然し、企業に見れば、税の無い方が、或いは少ない方がその資本蓄積の目的達成にかなうのは自明のことである。この場合企業と国家は相反した利害関係にある。

企業によって多少その目的が異なることは認めなければならない。中には国家に貢献をすることを辞さない企業もあろう。或いは社会への奉仕をいさぎよしとするものもあろう。然し、どの企業であろうと利益追求は至上目的である。又企業の利害は企業とその株主につく。それ以外の何者も企業の直接の利害対象外にある。企業の籍のある国家や文明の盛衰は——それが企業の利益追求に関係しない限り——基本的には企業にとって関係のないことである。都合が悪くなれば企業はその在籍国を棄て、他国へ移籍することを躊躇しない。ヤオハンが香港にその本社を移したのはその例である。又法人税免除のtax havenへ企業が転籍することはよくある。そのため在籍国の歳入を減少させることになってもそれは企業の知ったことではない。究極的にいって企業は国家に対する忠誠心、愛国心はもたない。

4. コスモポリス

もう一つのタイプのグローバリゼーションのセンターは都市である。といってもどのような都市でもグローバリゼーションのセンターになれる資格があるわけではない。コスモポリスといわれる都市には文化的、政治的、芸術的、又経済的機能が濃厚に、又密に集注している。ファッションでは「パリ・コレクション」、「ニューヨーク・コレクション」、「東京コレクション」等というが、「フランス(アメリカ、日本)コレクション」のような表現はない。パレーの中心はパリでありモスクーである。金融の中心はロンドンでありニューヨークであり東京である。二次的センターとして香港があり、シンガポールがある。このようにコスモポリスには文化的、経済的、政治的価値が集積し、そこからこれらの価値は周辺へと浸透していく意味においてグローバリゼーションの中心として重要な役割を果たしている。

5. 民族

一つの異色のグローバリゼーションの中心として民族がある。ここでは世界にまたがる中華系民族を代表としてとりあげる。

(Ong and Nonini 1997) 海外中華人は殆どといっていい程経済的には恵まれない状態で移民した。しかしその中で、海外で富をきずいた人たちも多い。その富は個人の努力できずいた場合も勿論あるが親族或いは同郷人とで企業を経営し、その協力によるものも多い。このように華人間で協力し合うことによってその富は同一民族の中にとどまることになる。そしてその富は彼らの在住する国のみならず、他国にも投資される。又他国に在住する親族や同郷人と協力関係をもつ場合もしばしば見られる。

(渡辺・今井編1994; 山田1996; 遊編著1995)

このような親族、同郷人との経済的協力、また多国間の協力は海外日系人では全くと

いっていい程見られない。あったとしても失敗に終ることが多い。日系人はむしろ個人で事業をするのが殆んどである。

「兄弟は他人の始まり」という諺はこの間の日本人、日系人の人間関係を如実に表わしている。日本で伝統的な長男（或は長子）相続制、つまり一子相続制度は兄弟姉妹中一子のみ之家の富を与え他のものには一切与えない制度では、非相続者は相続者の支配下で働くか、独立を余儀なくされた。現在でも農家では一子相続制度がいきている。このような制度のもとでは兄弟間のほぼ平等な協力は望めない。それに反して、中国の伝統親族制度では少なくとも男兄弟間では平等が認められ、資産は共同で所有し共同で経済活動することが規範とされる。相続においても資産は等分に分配される。他の事情もあるには違いないが、このような伝統的社会制度を理解することが、グローバル化する日本と中国の違いを明らかにし、日系人兄弟の非協力も謎ではなくなる。

海外在住中華人の場合、子弟を他国に留学或いは在住させることがしばしば見られ、これは中華人の戦略と見なしても過言ではない。ところが日系人は他国に親族をもつ、或いは他国に子弟を留学させるということとはついでない。ということはグローバルなネットワークをつくることは日系人では可能性はまずないが、中華人ではそのようなネットワークはどんどんつくられ、そのネットワークは企業拡大、資本集積に役だたせることによって海外中華民族のグローバル化に寄与していると充分に言える。

海外中華民族と日系とのもう一つの大きな違いがある。それば海外中華民族の場合、祖国である中国への資本投資が積極的に行われ、中国の経済発展に大きく寄与している。1996年の海外からの中国への投資は約42,350億ドルで、その70.9%が海外華人からの投資とされている。(Huang 1998) それに反し、海外日系人の場合はそのような

祖国への経済貢献はあるにしても微々たるものに過ぎない。これは、「移民は棄民」という日本人の、殊に政府官僚の基本的態度に対する反動かもしれない。祖国の特定の親族や友人へ経済的援助をすることはあっても（例えば第二次大戦直後のように）、「棄てられた民」がどうして棄てた国へ貢献しなければならないだろうか。このような大きな疑問は中国の場合はない。中国は海外移住者も中華民族という大きな枠に包含する立場をとってきた。それ故、中国移民としては祖国への貢献ということがすなおに、問題なく考えられるのではなかろうか。

海外華人をグローバル化の中心と見る場合、上記の他の中心とは大きく異った点がある。それは「中心」が地理的に限定された空間を指すのではなく、一定の組織を指していることである。

IV. センターのヒエラルキー

グローバル化における中心一周辺の関係はダイナミックであり複雑である。「中心」は資本蓄積の場であり、文化的、象徴的価値の発信地である。周辺は中心に資本蓄積を可能にし、文化的、象徴的価値を受信する場である。但し、西欧、アメリカ、ロンドンといった、普通「中心」とされている場も資本蓄積の中心でありながら文化的、象徴的価値の受領地であることもある。例えば、西欧米はイスラーム文明の受信地であり、アメリカは日本産カメラや電気製品の受領地であり、ロンドンはフランス料理の受領地である。このようにある特定の機能では中心であっても、他の機能では周辺になることは常時ある。

このように文明、国家、都市等種々のタイプの中心が、場合によっては周辺にもなるため、固定した中心とその周辺という不変のヒエラルキーというものはグローバル化では考えられない。この変転す

る中心-周辺現象を更に複雑にするのは、中心-周辺が単に二段階でない、ということである。ある中心の周辺は中心として機能し、周辺をもつ。そして更にこの周辺もさらに周辺をもつことによって中心になる可能性がある。そして、このように幾段階にもなった中心-周辺関係は前述のように、その関係を反転させる可能性をもつ。と同時に、中心はその周辺の周辺と直接の発信-受信関係になることもある。

このダイナミックな関係を明確に理解するためには、一方概念としての「中心」及び「周辺」と、他方場合によっては中心となり場合によっては周辺となる実証的現象-例えば日本という国家、ニューヨークというメトロポリス、西欧米という文明-とを峻別して考える必要がある。そして、概念上の中心（或いは周辺）は常に中心（或いは周辺）であるが、実証的現象は中心であったり、周辺であったりする、ということ常を常に念頭においている必要がある。

V. 結語

このように考えてくると、西欧米を唯一のグローバリゼーションの中心とし、又その文明をグローバリゼーションの唯一のタイプとするのは間違っている、ということには明らかだろう。そして日本という国家（ないし文明）もグローバリゼーションの中心であり得ることも明らかになったと思う。日本のみならず、グローバリゼーションの中心となり得るものは世界各地に点在し、それは文明であったり国家であったり、又都市、企業、はては民族も中心となり得る。西欧米はドミナントなグローバリゼーションの中心だがその一つにしか過ぎない、という自覚が強いられる。

又、西欧米文明であれ、その構成部分である、国家、メトロポリス、或いは企業であれ、それは必ずしも中心であることはない。理論的にはどのような単位でも中心に

なり得、又周辺になり得る。このような考え方が真の「相対化」である。このような観点から見ればグローバリゼーションの理論構築はまだこれからである。これまで議論されてきたグローバリゼーション「論」は主に西欧米を中心と見なした一般化 (generalization) であり、理論とは言えない。理論構築のためには各種のグローバリゼーションを比較しながら、発信、受信のダイナミックな関係を十分に考慮し、中心と周辺の間関係を明らかにする必要がある。この作業はまだ始まったばかりである。

掲載文献

- Appadurai, Arjun
1996 *Modernity at large: Cultural dimensions of globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Befu, Harumi
In press. *Fundamentals of globalization*. In Peter Kleinen ed., *Fundamentalism and Science*.
- Beyer, Peter
1994 *Religion and globalization*. London: Sage
- Clarke, Peter B. and Jeffrey Somers eds.
1994 *Japanese new religions in the West*. Sandgate: Japan Library
- Featherstone, Mike
1995 *Undoing culture: Globalization, post-modernism and identity*. New York: Sage.
- Giddens, Anthony
1990 *The consequences of modernity*. Stanford: Stanford University Press
1991 *Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age*. Stanford: Stanford University Press
- Huang, Cen
1998 *A review of studies on migrant labour in South China*. International Institute of Asian Studies. 1998. No.16. p.32.
- Huntington, Samuel P.
1996 *The clash of civilizations and the re-making of world order*. New York: Simon and Schuster.

- Ionescu, Sanda
 1997 The story of a qualified success. Paper presented in the session on “Japan outside Japan” at the European Association for Japanese Studies Conference, Budapest, Hungary.
- 西田耕三
 1990 『グローバルC Iの構図』東京、中央経済社。
 Ohmae, Kenichi
 1987 Beyond national borders: Reflections on Japan and the world. New York: Kodansha International.
 1995 The end of the nation state: The rise of regional economies. Glencoe: Free Press.
- Ong, Aihwa and Donald Nonini eds.
 1997 Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism. Routledge
- Pasha, Mustapha Kamal and Ahmed I. Samatar
 1997 The resurgence of Islam. In James H. Mittelman ed., Globalization: Critical reflections. Boulder: Lynne Rienner. Pp. 187–201.
- Pieterse, Jan Nederveen
 1995 Globalization and hybridization. In Mike Featherstone, Scott Lash, and Roland Robertson eds., Global Modernities. London: Sage. Pp. 45–68.
- Robertson, Roland
 1992 Globalization: Social theory and global culture. Newbury Park: Sage
 1996 Glocalization: Time-space and homogeneity-heterogeneity. In Mike Featherstone, Scott Lash, and Roland Robertson eds., Global Modernities. London: Sage. Pp. 25–44.
- 白石さや
 1998 マンガ・アニメのグローバリゼーション。五十嵐暁郎編 『変容するアジアと日本—アジア社会に浸透する日本のポピュラーカルチャー』横浜、世織書房。317–349頁。
- Wallerstein, Immanuel
 1974 The modern world system: Capitalist agriculture and the origins of the European world-economy in the sixteenth century. New York: Academic
- 渡辺利夫・今井理之編
 1994 概説華人経済。東京、有斐閣。
- Waters, Malcom
 1995 Globalization. New York: Routledge.
- 山田修著
 1996 華僑—最強の家業経営。東京、日本実業出版社。
- 遊仲勳編著
 1995 華僑・華人経済。東京、ダイヤモンド社。

本論文のための研究は京都文教大学人間学研究所、文部省（科学研究助成 # 10041094 [研究課題名：民族誌を基盤とするグローバル・ジャパンのモデル化とグローバリゼーション理論の構築] 及び # 08041003 [研究科題名：アメリカ大都市圏におけるアジア・太平洋系移民集団の民族間関係に関する比較研究])、(ロスアンゼルス在) 全米日系博物館、伊藤謝恩育英財団および Ito Foundation USA からの助成による。ここで感謝の意を表したい。

ABSTRACT

Rethinking Globalization

Harumi BEFU

Received concept of globalization as propounded by Western scholars assume (1) that there is one and only one center of globalization, (2) that this center is the West, and (3) that this center is the Western civilization. In this paper I demonstrate (1) that there are multiple centers of globalization, (2) therefore that the West is not the only center of globalization, and (3) that in addition to civilization, nation states, multinational corporations, cosmopolises, and even ethnic groups can be centers of globalization.